

## <アーカイブズと学校教育>

### 山口県文書館所蔵アーカイブズガイド 学校教育編 (10) 一月間資料小展示等の教材化一

山本 明史

当館では、所蔵資料を学校教育現場での活用という観点から捉えなおし、授業で活用しやすい形で提供する取り組みを平成 22 年度から行い、その成果を、『山口県文書館研究紀要』第 38 ～ 46 号に掲載した。また、活用しやすいかたちに再編集した上で、当館 Web サイトにも PDF の形式でアップロードしている。

これまでの作業では、教科書の各学習項目に対し、「関連する所蔵資料にはどのようなものがあるか」という視点で資料を選択し紹介してきた。本稿では、これとは逆に、これまで当館において数多く行われてきた月間資料小展示や普及事業であるアーカイブズウィークにおける展示解説シートの中から題材を選び、「この展示はどの学習で活用が可能か」という視点からの教材化を試みた。このことは当館所蔵資料の学校教育現場での活用のみならず、他の施設で行われている優れた展示の教育現場への導入の際の参考になると考える。

展示内容を授業に取り入れる際には、それを「どの授業の、どの場面で、何を目的に、どのように提示するか」についての明確な見通しが不可欠である。そのためには、展示内容を十分に理解した上で、展示から学習教材へ変換する作業が必要となる。学校教育支援においては、ここにアーカイブズと学校教育現場との接点があり、連携が必要な場面であると思う。この点を意識することにより、学校教育支援における、アーカイブズと学校教育現場との役割分担を整理することもできるだろう。様々な展示における、資料との小さな出会いの感動を児童生徒に素直に伝えることができるならば、授業のさらなる活性化につながると思う。

なお、本稿では児童生徒が資料を通して考えるきっかけになればとの思いから、学校生活上の身近な資料を中心に選んだ。

\* 項目立ては東京書籍の中学校教科書『新しい社会 歴史』に準拠した。本稿のトピックの番号は、前稿からの通番とした。

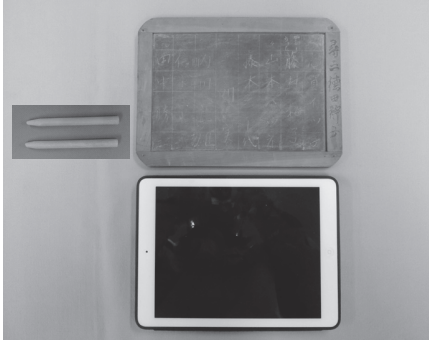
\* アーカイブズガイド学校教育編の Web サイトアドレスは <http://archives.pref.yamaguchi.lg.jp/index/page/id/524/>。スマートフォンやタブレット端末の方はこちらの QR コードからアクセスが可能。



➤ 本稿のトピックの関連展示は以下の通り。

- \* No.214 石盤と石筆（明治時代の学習用具）【4-2-2 明治維新の三大改革】
  - ・平成27年度第10回資料小展示「大正時代の学習ノート」
- \* No.215 「お手本通りに写す」（明治時代の学習スタイル）【4-4-6 近代文化の形成】
  - ・令和3年度第2回資料小展示「臨画・臨書 ～お手本通りに描（書）く～」
- \* No.216 運動会【5-2-3 新しい文化と生活】
  - ・平成22年度第8回資料小展示「スポーツ時代史展Ⅲ 大正時代の運動会」
  - ・第16回中国四国地区アーカイブズウィーク（以下 AWと略す）解説シート「運動会 ～明治から大正期～」
- \* No.217 体育大会のプログラム（部活動の対外試合の足跡）【5-2-3 昭和恐慌と政党内閣の危機】
  - ・令和2年度第3回資料小展示「戦前の県体育大会プログラム～山口県のスポーツ いま・むかし～」
  - ・第16回 AW 解説シート「山口県体育大会のプログラム（戦前）」
- \* No.218 ラジオ体操【5-2-3 昭和恐慌と政党内閣の危機】
  - ・第16回 AW 解説シート「ラジオ体操」
  - ・アーカイブズガイド学校教育編「戦時色の深まり（大日本国民体操）」
- \* No.219 「遠足（とのおし）」（幕末の長距離走）【4-2-3 開国後の政治と経済】
  - ・第16回 AW 解説シート「幕末期の長距離走「遠足（とのおし）」
- \* No.220 号令（「まわれー、みぎ」の源流）【4-2-4 江戸幕府の滅亡】
  - ・第13回 AW 解説シート「身体に刻まれる音 ～号令・号音～」
- \* No.221 「長防臣民合議書」（幕末の情報戦）【4-2-4 江戸幕府の滅亡】
  - ・第14回 AW 解説シート「長防臣民合議書」（木活字版・製版）
- \* No.222 「諸国産物帳」（幕府による産物調査）【3-3-4 享保の改革と社会の変化】
  - ・第14回 AW 解説シート「産物帳」とは？
  - ・第11回 AW 解説シート「薬草を採る」
- \* No.223 すごろく・3旗ならべゲーム・野球盤（玩具）【5-2-3 新しい文化と生活】
  - ・平成23年度第8回資料小展示「明治・大正のレトロすごろく」
  - ・令和4年度第6回資料小展示「明治期のレトロ野球盤」
- \* No.224 置き薬【4-2-3 富国強兵と文明開化】
  - ・第11回 AW 解説シート「人々の健康を守った売薬（置き薬）」
  - ・第17回 AW 解説シート「集めて考えよう」

## No.214 石盤と石筆（明治時代の学習用具）



\* 徳田家文書（山口市）252「石盤」・同253「白墨 [石筆]」（下は現在のタブレット端末）

## 【解説】

写真は石盤と石筆で、鉛筆と学習ノートが普及する前、主に明治時代に用いられた学習用具です。大きさは現在のタブレット端末とほぼ同じです。

江戸時代の寺子屋では、文字の習得には墨と筆が使われましたが、西洋式の教育方法の導入と共にこの石盤と石筆が日本に入ってきました。これにより墨を摺る手間がなくなり、布などでこすれば消すことができ、何度でも繰り返し字が書けるようになりました。欧米では筆算の道具として、また、各自の答えを石盤に書き、それを教師に向けて一斉に掲げるなど生徒と教師とのコミュニケーションツールとしても用いられましたが、日本ではもっぱら読み書きの学習で用いられました。

右下の写真は、1873（明治6）年に諸葛信澄（長府藩お抱えの絵師の家に生まれ、師範学校（後の東京師範）初代校長となる）が著した「小学教師必携」です。「習字」、「書取」、「算術」の項目で石盤を使った教授方法が丁寧に解説されています。例えば習字では、「五十音図を用いて文字の書き方をよく説明し、まず教師が黒板にお手本を書き、生徒に各自の石盤に書かせなさい。石盤に書かせる時に筆の持ち方をよく教えなさい」、「生徒が石盤に書く時、小さな字を書いたり、石盤全面に大きな字を書いたり、乱雑に書いたりすることがあるので、教師が黒板にお手本を書く際には縦横の直線を引き、その中に正しく書くようにしなさい。生徒へも同じように石盤に線を引かせて書かせなさい」とあります。

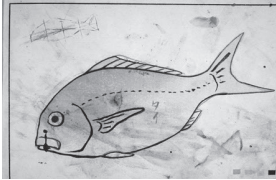
西洋から入ってきたこの新しい教具を使いこなそうとする様は、ICT教育機材の導入に試行錯誤を重ねる現在の学校教育現場の姿と重なります。

\* 志道家文書 477「小学教師必携 全」

\* 参考文献：添田晴雄「筆記具の変遷と学習」石附実編著『近代日本の学校文化誌』、思文閣出版、1992年

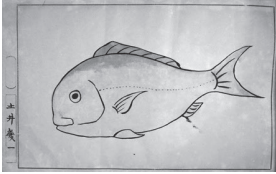


## No.215 「お手本通りに写す」(明治時代の学習スタイル)



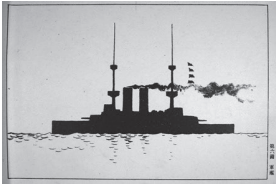
(写真上から)

- \* 〔タイ〕教科書：「尋常小学毛笔画帖 第五学年女生用」(教科書文庫 明治 43-16)
- \* 〔同〕児童作品：「第三回学芸展覧会成績品 図画部」(小野家文書 409-8)
- \* 〔軍艦〕教科書：「尋常小学新定画帖帳 第三学年 児童用」(徳田家文書 246)
- \* 〔同〕児童作品：「図画練習帳」(徳田家文書 245)

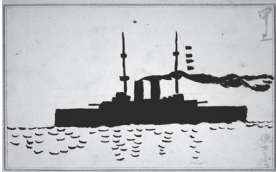


【解説】

明治時代の図画教育は、教科書のお手本をもとに、お手本通りに描き写す「臨画」を中心に行われました。左の写真は教科書のお手本と児童の作品です。一見、ぬり絵の様にも見えますが、お手本が丁寧に写し取られています。



題材には、動植物や身近な文物のほか、幾何学的な模様などもありました。こうした臨画中心の図画教育は、やがて大正時代に入ると、自由な写生の取り入れなどを主張する自由画運動が起こり、変化が見られます。

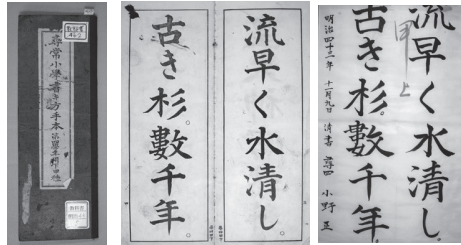


習字の場合も同様で、お手本をよく見ながら書く「臨書」が行われました。下の写真は

1910(明治 43)年刊行の習字の国定教科書と児童の作品です。

習字の国定教科書には「甲種」と「乙種」の2種類あり、甲種の書者は日高秩父で、彼の書の特徴は、起筆、終筆、転筆、はねなどに「力こぶ」が入ったような筆法(顔真卿の筆法)で書かれた力強い書風にあり、現場では教えるにいと不評を買っていたようです。写真は甲種の教科書で、児童の作品でもお手本通り、起筆、終筆などに「力こぶ」がしっかりと意識して書かれています。

- \* (左から)「尋常小学書キ方手本 第四学年用下甲種」(教科書文庫 明治 43-5)、お手本、児童作品：「習字帳」(小野家文書 412)
- \* 参考文献：滋賀大学附属図書館編『近代日本の教科書のあゆみ』, サンライズ出版, 2006年





## No.216 運動会



- \* (左) 御園生家文書 52「山口高等女学校秋季大運動会 キャプテンダンス 本科3年生実科2年生」(大正4年)・(右) 佐倉谷家文書 72(8の7)「山口高女運動会ニテ 小学校四百米リレー第一着」(大正12年)

## 【解説】

山口県内初の運動会は、1885(明治18)年に山口中学校で行われた「天長節祝賀運動会」です。その後、県下の各中学校、私立学校に伝わり、それらを付近の小学校が模して広く行われるようになりました。

左上の写真は県立山口高等女学校(現県立山口中央高等学校)の運動会の記念絵はがきで、1915(大正4)年のものです。たくさんの観衆や万国旗、生徒たちの服装等に当時の運動会の雰囲気を感じられます。

大正11年に湯田から白石(現山口大学教育学部附属山口小学校の場所)に校舎を移転してからは、広いグラウンドを利用して、県内の高等女学校との対抗戦や、近隣の小学校を招いて対抗トラック競技が行われるなど大規模化し、その応援のため大観衆が集まりました(写真右上)。

絵はがきは、学校の各種記念事業に際し、しばしば作成されましたが、とりわけ運動会は定番のコンテンツで、数多くの絵はがきが残されています。これらの絵はがきと、下に紹介する生徒自身による運動会の作文などを合わせてみると、当時の運動会が情景豊かに再現できます。

## 山口高等女学校 運動会の記

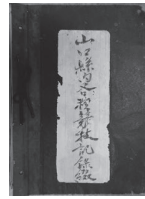
やよひ

天高くして気清き十月十六日、我校の運動会ぞ催されぬ。会場は狭けれど、万国旗高くとりどりに美しい朝風に翻り、廊下は来賓席にあてられて、常の学び屋と様かはりたる心地しぬ。午前九時開会、一同整列、校長開会の御言葉あり、一同礼を終るや競技にうつる、勇ましき楽隊の音につれて、三年甲乙の舞ひ始めは、これぞ御代の春なる、こはこれ行啓記念の舞踏にして、過ぎしこの春、辱くも台覧に供し奉りしもの、小春の今日又見る事のなつかしうも亦ゆかし、次は本科一年甲のフットボール、蹴りつ受けつ終に東組の勝となりぬ、叫びの聲に充たされし庭も静かなる楽隊と共に、専一のロッヂエスターショウチス演ぜられ、更に本二のスプリンレースあり、我れ劣らじと勇み出でたるを、途中にて球を落して拾はんとする其周章の体、見る眼にはこよなくおかし(後略)、『防長女子教育』第46号/明治41年11月発行(雑誌文庫Y防長女子30)

## No.217 体育大会のプログラム（部活動の対外試合の足跡）



| 走               |           | 幅   |           | 跳   |           | (学生) |  |
|-----------------|-----------|-----|-----------|-----|-----------|------|--|
| 陸上競技部第一日午後3時45分 |           |     |           |     |           |      |  |
| 決勝              |           |     |           |     |           |      |  |
| 11              | 假田 務(岩中)  | 10  | 田島 直人(岩中) | 19  | 岡田 達男(安中) |      |  |
| 37              | 重枝 秀人(柳中) | 31  | 松田 喜作(柳中) | 51  | 田村 忠(周中)  |      |  |
| 49              | 中柴 誠治(周中) | 61  | 河野 泰次(柳商) | 69  | 村上 龍男(高中) |      |  |
| 76              | 上田 義雄(下工) | 85  | 島田 早苗(徳中) | 101 | 和田 章(防中)  |      |  |
| 102             | 津森 忠雄(防中) | 126 | 末吉 義雄(山師) | 119 | 吉松 直實(山師) |      |  |
| 132             | 岩城 一介(山中) | 143 | 高村 孝治(山中) | 159 | 小林 三郎(鴻中) |      |  |
| 170             | 田口 豊(山中)  | 184 | 藤井 久人(宇工) | 186 | 花田 繁(宇工)  |      |  |
| 206             | 内田勇次郎(長中) | 216 | 菊谷 敏夫(下中) | 233 | 堀 三男(萩中)  |      |  |
| 225             | 荒瀬 國亮(萩中) | 252 | 新庄 進(萩商)  | 241 | 末益寅太郎(萩商) |      |  |
|                 |           | 1   | 2         | 3   | 4         | 5    |  |
| 距離              |           |     |           |     |           |      |  |



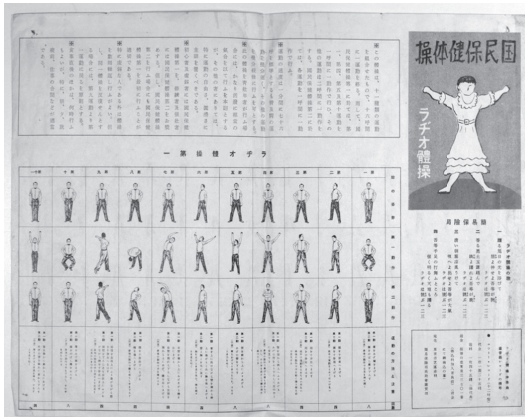
\* 池田家文書  
6「山口県内  
各種競技記録綴」

## 【解説】

写真の「山口県内各種競技記録綴」は旧制中学校の体育教師、池田五七郎教諭が綴った山口県体育大会等のプログラム集です。生徒を引率し、参加した大会のものと思われます。1927（昭和2）年から約10年間分のプログラムが収録されており、この間の大会運営の様子や参加選手を知ることができます。また、表紙のデザインやスポンサーの各種広告からは、スポーツを包む当時の時代の空気を感じ取ることができます。この資料に綴じられているのは、主に「陸上競技」、「庭球（テニス）」、「籃〔籠〕球（バスケットボール）」、「排球（バレーボール）」、「野球」、「蹴球（サッカー）」のプログラムです。およそ90年前のプログラムで、種目の呼称等に多少の違いはありますが、スタイルは現在のスポーツ大会のものと同様です。

プログラムには有名な選手の名も見えます。昭和2年の県体育大会プログラムに「田島直人（岩国中学）」の名前があり、走幅跳と棒高跳の2種目にエントリーしています。田島直人選手は山口県岩国市出身の陸上競技選手で、昭和6（1931）年のロサンゼルスオリンピック走幅跳6位入賞、昭和11年ベルリンオリンピック三段跳で優勝（16m00世界新記録）・同走幅跳3位という輝かしい競技実績を残しました。とりわけ三段跳の優勝の記録は以後16年間破られることのなかった大記録でした。彼が陸上競技選手としての頭角を現し始めるのは昭和3年からですので、残念ながら、この大会では結果は残せていません。この昭和2年のプログラムは、決して田島直人選手の栄光の記録ではありませんが、記録向上をめざし努力を重ねていた無名選手時代の彼の姿をとめている点で私たちに勇気を与えてくれます。

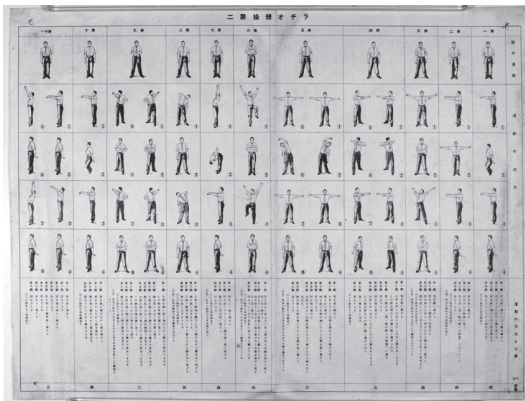
## No.218 ラジオ体操



\* 土山家文書 635「国民保健体操」(上:表面・下:裏面)

## 【解説】

ラジオ体操は1928(昭和3)年、逓信省簡易保険局の提唱で、国民の健康の保持増進のために始められ、全国放送は翌年から行われました。



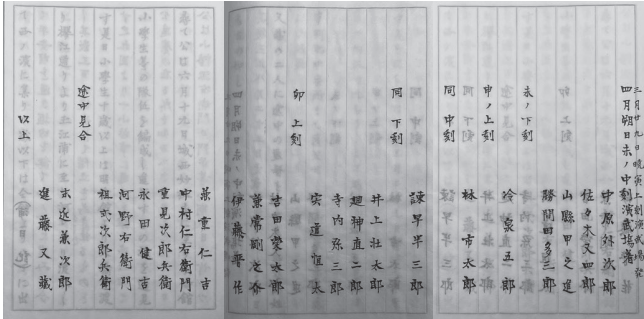
陸軍戸山学校の元軍楽隊長だった江木理一アナウンサーの「全国のご家庭のみな様、おはようございます…」から始まる明るいかけ声のもと、毎朝、体操は全国に届けられ、各家庭へのラジオの普及と相まって、ラジオ体操は国民の生活に急速

にとけ込んで行きました。昭和7年には、第二体操も作られました。

写真はラジオ体操の普及用のチラシで、表面にはラジオ体操第一の図解説明のほか、ラジオ体操を行う際の注意事項、ラジオ体操の歌の歌詞、ラジオ体操のレコード盤の入手方法が書かれています。また裏面はラジオ体操第二の図解説明となっています。このチラシは、実際に壁に掲示されてPRに使われていたようで、四隅に押しピンの跡が残っています。

\* ラジオ体操のその後の動きについてはアーカイブズガイド学校教育編「戦時色の深まり(大日本国民体操)」を参照。

## No.219 「遠足（とおあし）」（幕末の長距離走）



\* 両公伝史料  
1454「忠正公  
伝 第11編  
第5節 武学  
の奨励（遠足  
と健歩）」

## 【解説】

萩藩では、1855（安政2）年3月29日に、藩校の明倫館演武場を発着点とし、肥中（ひじゅう）番所（現下関市豊北町）を折り返しとする長距離走「遠足（とおあし）」が行われました。写真にはその参加者名と着順が書かれています。29日暁寅上刻（午前3時すぎ）にスタート。西暦に換算すると5月15日にあたり、残された日記などによれば、この日は晴天で、ちょうど初夏の日差しが強くなり、気温も上がってくる長距離走には少し苦しい時期でした。

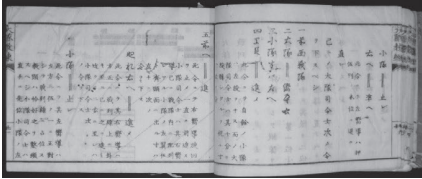
明倫館から肥中番所までは、距離にして片道およそ55km、往復110kmの長丁場でした。現在各地で行われているウルトラマラソンに匹敵する距離です。

走者は20名、年齢は10代から30代で、まず井原外次郎ほか3名が翌4月1日の未中刻（午後2時ごろ）にトップ集団でゴールし、その後順次到着。翌4月2日の早朝に9名が帰り全員がゴールしました。上位集団には10代の若者が目立ちます。

この遠足についての記述がある「井原日記」には、この遠足の目的を「防御のための足慣らし」とし、「一昨々年」ごろから「健歩」（ロングウォークのことか）が盛んになったと伝えています。遠く響灘の海上を見渡せる肥中が折り返しであったことから、外国を警戒しての藩内の士気高揚が狙いであったことを窺わせます。

\* 「明倫館御用掛日記」（毛利家文庫15文武105）にも、遠足の参加者名と着順が記され、「浦日記」（毛利家文庫71藩臣日記2）、「井原日記」（同3）に関連する記述が残されています。また、那珂通高著『旅の苞－憂国余話－』の中で、彼が萩藩士来原良蔵から聞いた話として、萩藩の長距離走を紹介しています。

## No.220 号令（「まわれー、みぎ」の源流）



\* 一般郷土史料 1329 「大隊教練書  
（長門練兵場蔵版）」

## 【解説】

現在、私たちは、「まわれー、みぎ」や、「まえへー、ならえ」、「まえへー、すすめ」、「ぜんたーい、とまれ」などの号令がかかると、ある種のリズム感をもって体が動きます。これらの号令は、幕末期に西洋銃陣の導入と軌を一にして日本に入ってきました。

西洋銃陣では、号令および号音により軍隊が組織的に動かされ、そのため、兵士には、号令の意味を正確に理解し、それを行動に移す能力が求められました。ドラムによる号音についても同様で、これを身に付けるためには相当な訓練が必要であり、そのため、銃陣教練は藩校の明倫館はもとより、県内各地で実施されました。

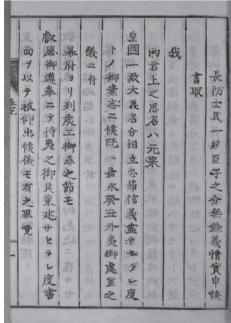
当館および県立山口図書館には、長門練兵場蔵版の「生兵教練書」、「小隊教練書」、「大隊教練書」（写真上）、「散兵教練書」、「改正鼓譜」などの西洋銃陣の教練書が残されています。これらは教練指導のマニュアル書で、新兵に対し段階をおって訓練が施されました。

教練書では号令を「示動令」と「発動令」の2つに分けて説明しています。「示動令は声高く明瞭にして、語尾を少し伸ばす。また発動令は厳かにして、短く」とあります。例えば、「まわれー、みぎ」では「まわれー」の部分が示動令、「みぎ」の部分が発動令です。示動令により行動の準備をし、発動令のタイミングで行動します。「まえへー、ならえ」も同様です。私達の身体に刻まれている号令の源流がここに 있습니다。

西洋銃陣の習得は、長崎海軍伝習所でオランダ式で行われました。その指導にはオランダ人教官がこれにあたったので、隊の指示はオランダ語で行われました。例えば、「小隊＝止レ」は、オランダ語では「ヘロトン＝ハルト」（ヘロトンは「小隊」、ハルトは「止レ」）。「右へ＝準（なら）へ」は「レクツ＝リクトユー」、「進メ」は「マルス」です。この伝習に参加した萩藩士前原一誠は友人への手紙の中で、「号令は原語（オランダ語）で、一向に分かりも覚えられもしない」とこぼしています。聞いたこともないオランダ語による指示に伝習生たちは大いに戸惑ったようです。やがて、日本語による号令に置き換えられていきました。



## No.221 「長防臣民合議書」(幕末の情報戦)



\* 佐川家文書(大島町)252)「長防臣民合議書 完」(木活字版)と当館所蔵木活字

## 【解説】

第2次長州征討を間近にひかえた1865(慶応2)年3月、萩藩は自らの正当性を強くアピールするために、「長防臣民合議書」という冊子を大量に

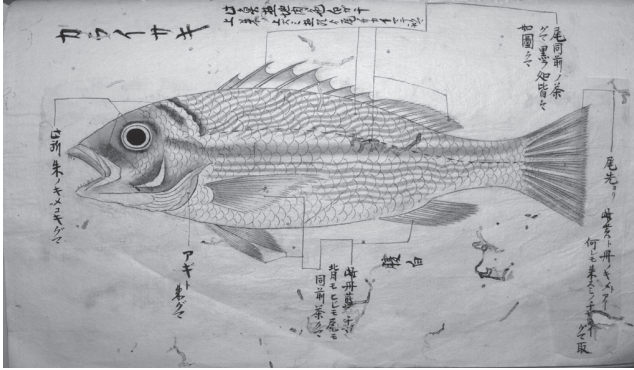
印刷し、藩の内外に配布しました。そこでは、黒船来航以来、長州藩が一貫して朝廷および幕府に忠誠を尽くしてきたことや、それにもかかわらず「朝敵」となっている現状に対する憤りが理路整然と述べられています。また、この汚名を晴らすために、一致団結して幕府と対決する覚悟も記されています。

これを起草したのは、当時、広島で幕府との折衝に当たっていた穴戸璣(備後助)です。同年1月4日付の山田宇右衛門らにあてた書簡の中で、「藩内が一致団結し、少しの隙間もない姿を藩外に見せることが必要」、「すぐに刊行して藩内はもとより他国へも配りたい」、「早くしないと間に合わない」、「写本では効果が薄いため、印刷をする」、「刊行されたら藩内は後回しにしても、先に藩外に配りたい。広島には40～50冊送って欲しい」などと述べています。情報の力を利用して幕府との交渉を有利に進めたいという、萩藩の思惑が見て取れます(「子爵穴戸璣翁談話速記」〈両公伝史料2827〉)。

36万部刷られたというのは誇張された数字のようですが、大量に刷られたのは事実で、当館にも数多くの「長防臣民合議書」が残されています。印刷された「長防臣民合議書」には楷書片仮名書の木活字版と、草書体で彫られた製版(木版)の2種類があります。まず木活字版が先行し、その後、木活字の修正版ならびに製版が続いたと考えられます。活字が持つ力強さに加え、版を作るのが容易で修正にも対応できる木活字の利点が認識されていたのかもしれませんが。



## No.222 「諸国産物帳」（幕府による産物調査）



\* 毛利家文庫  
34 産業 3 「長門産物之内江戸被差登候地下図控」のうち「カラサギ」の図。

## 【解説】

江戸幕府の医師丹羽正伯は、幕府より本草学の大著

「庶物類纂」の完成を命じられ、その編集のため、1735（享保 20）年から数年をかけて、各藩に命じ、全国の動植物や鉱石についての実態調査を行いました。

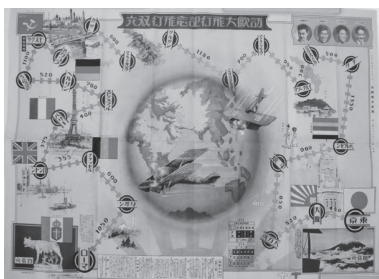
調査は、領内の産物を漏れなく書き上げさせる悉皆調査で、産物を穀類、菜類、菌類（きのこ）、瓜類、果類（くだもの）、木類、草類、竹類、魚類、貝類、鳥類、獣類、虫類、蛇類、金石類などのジャンルに分け、一点ずつ名称を記した「産物帳」の提出を求めました。

これにより、産物帳は江戸時代中ごろの全国の動植物相を表す大変貴重なデータとなりました。中には、既に絶滅しているものや稀少になったものも含まれています。また、それぞれの名称は現地で呼ばれている通りにかな書きするよう求めたため、当時の動植物等の地方での呼び名の違いを知ることができます。

また、丹羽正伯は地方独自の産物や名称だけでは不明なものについては、彩色を施した解説付きの写生図である「絵図註書」の提出を要求しました。写真は萩藩が提出した「絵図註書」の原図を綴った資料で、カラサギの図の部分です。精巧な図が残されたことにより、現在でも動植物の特定が可能となっています。

完成した「産物帳」と「絵図註書」は、全部で 1,000 冊を超える膨大なものであったと考えられますが、残念なことに提出された原本は現存していません。しかし控えとして作成されたものが各地に残されており、その一部を見ることができます。当館も防長両国の産物帳作成過程の資料を数多く所蔵しています。

## No.223 すごろく・3旗ならべゲーム・野球盤（玩具）

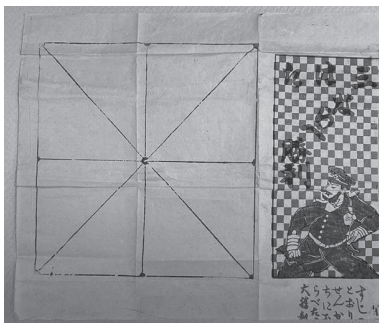


\* 内藤家文書 588「訪欧大飛行記念 飛行双六（大阪朝日新聞付録）」

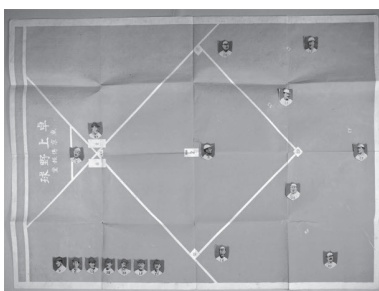
## 【解説】

子供たちは時代の動きに敏感です。子供向けに作成された玩具にはいち早く時代が反映され、玩具は時代を写す鏡となります。

写真上のすごろくは、1925（大正14）年に、朝日新聞社の飛行機「初風（はつかぜ）」、「東風（こちかぜ）」によって行われた冒険飛行をゲーム化したものです。2機は東京を出発し、朝鮮、満州を縦断。シベリアを經由しモスクワに到着。その後、ベルリン、パリ、ロンドン、ブリュッセルの各都市を経て、目的地ローマに到着しました。総飛行距離1万7403キロ、期間は95日間におよびました。すごろくには、2機の雄姿と経由した各国の都市の文物が描かれています。子供たちは、このすごろくで遊びながら、冒険飛行に胸を踊らせつつ、見たことのない世界の国々に想いを巡らせたことでしょう。



\* 堀江静子家文書 314「ゲーム盤」



写真中は、おなじみの縦横斜めに○×を先に3つ揃えた方が勝ちとなる3ならべゲームです。「三はた・三ならべ・勝利」と題が付けられ、○と×の代わりに、旗を置くようになっています。明治時代初期の軍人を思わせる絵が使われ、「旗を置く」からは、戦いの場での制圧・占領を連想させます。

写真下は、1907（明治40）年に東京博報堂から発売された「卓上野球」という野球盤です。守備側と攻撃側が手持ちのカードを出し合いながら遊んだようです。このレトロな野球盤から、明治時代後期における、野球という新しいスポーツの人気の高まりを垣間見ることができます。

## No.224 置き薬



\* 佐川家文書（大島町）645・646・647・663・668）「薬袋」

## 【解説】

江戸時代、「置き薬」という形で民間に薬が普及していきました。「先用後利」と呼ばれる販売方法で、あらかじめ得意先に薬を置いて

おき、次回訪れた時に使った分だけ使用料を徴収するというものでした。

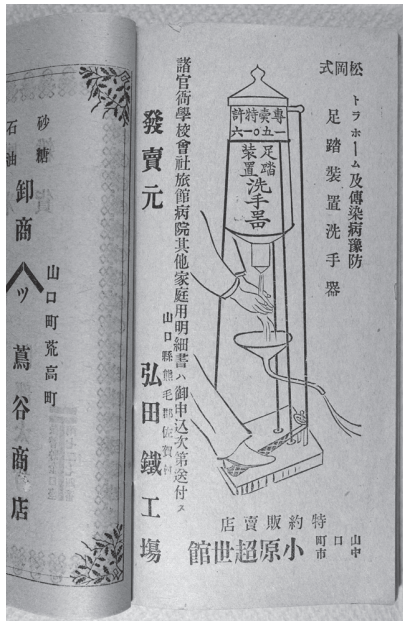
これにより、交通の便の良くない地域へも薬が届けられるようになりました。全国的には富山、大和、近江、田代（佐賀）などが有名でしたが、萩藩でも伊佐（美祢市）の売薬が藩内のみならず、他藩へも商圏を広げるほど盛んでした。他国の売薬業者との激しい競争もあったようですが、最盛期には関東地方まで販路を拡大しています。

しかし、明治以降、西洋医学重視の政策により、売薬に対する取締りが強化されて行きます。1870(明治3)年に「売薬取締規則」が公布され、薬については大学東校（現東京大学）で検査を受け、売薬業には免許が必要となり、それまで使われてきた「家伝」や「秘伝」などの称を用いることが禁止となりました。また、明治10年の「売薬規則」により売薬業者には営業税、鑑札料の支払いが義務付けられ、さらに明治15年の「売薬印紙税規則」により売薬には必ず定価を付記し、その1割の印紙税の支払いが義務付けられました。これは訪問時に期限の切れた薬を新しい薬と入れ替える販売方法をとってきた売薬業者に大きな打撃を与え、廃業に追い込まれる業者も多く出ました。近代化に成功し、薬の一大産地として発展していく地域がある一方、伊佐の売薬はその流れに乗ることができず、昭和18年を最後に営業を終了しました。

\* 置き薬は居間の柱にかけられたり、紙製の引き出しに納められて、いつも身近な目立つ所に置かれていました。収納用の袋（厚袋）は、それ自体が宣伝のための媒体で、ネーミングやパッケージのデザインに工夫が凝らされており、時代の変化をよく映しています。



## No.225 伝染病予防（足踏装置洗手器）



\* 滝口明城文庫 222 「山口案内」

## 【解説】

写真は、1908（明治41）年に出版された「山口案内」に掲載されている「松岡式トラホーム及伝染病予防 足踏装置洗手器」の広告です。

ペダルを踏むと上部から洗浄液が流れ出し、手で触ることなく、手指の洗浄ができる仕組みになっています。液体が出ている様子が描かれていますが、どのような消毒液なのかは、この図からははっきりしません。

ペダルの構造や洗浄液が出る高さなどは、2023（令和5）年2月現在、新型コロナウイルス感染症対策として、各地に設置されている足踏式の消毒器具に酷似しています。トラホーム（トラコマ）は、当時、学校などで流行していた伝染性の眼病で、失明の原因ともなる恐ろしい病気でした。この広告から、官公庁をはじめ、学校、会社、旅館、病院、家庭など人と人の接触が多い場所での使用が想定されていたことが分かります。

今から100年以上も前の広告ですが、病を避け健康を求める人々の切実な願いを、時を超えて実感させてくれる資料です。

\* 「山口案内」（明治41年刊）は、豊富な写真を用いて山口町をビジュアルに紹介した案内誌です。こうした案内誌には多くの広告が掲載されていますが、それらは当時の世相を反映しており、そこから時代の特徴を読み取ることができます。

